

戦前の子供の働き着にみる刺しものについて

山形県立米沢女短大 徳永幾久

目的 戦前の農家ではムクダになると 子供でも農繁期にはかり出され、手伝いをさせられるのが一般的であり、日常でも子供なりの仕事があったのである。この手伝い時の服装は 男の子は筒袖、もんぺ、胸前掛、肩当、背当、守甲、甲掛、あくとかけ、手拭などであり、女の子は元祿袖、もんぺ、肩当、前掛、手拭に専用の子守紐等である。これらは戦後洋服型に移行したが、戦前の子供の働き着には子供なりの刺し模様があり、形態及び模様構成に子供独自の特色がみられたので報告する。

方法 特に山形県 最上、村山地方の収集物及びその地域の着装調査より考察

結果 1)胸前かけ 男女共一巾物の中央に首通し穴があり、布を前後にたらずホッケ型で両脇で紐結むとする。模様構成は部分的、単独模様の組み合わせ型であり、子供の成長に応じて布を付けたす童図に適應した構成法である。2)肩当 短い帯型で肩から斜めにかけて、腰で紐結むとする。肩に物をのせたり、物を浅く時に使用、補強用の刺しと下端に子供の名が入る。3)もんぺ 膝に補強用刺しが入り、胸当 胸ホケットがつく。4)足甲当 指通しのある三角形布で、引張り方向に刺しが入る。5)足袋 赤黒糸で刺し文が入り、足の動きに適應した模様構成である。6)あくとかけ、古布をさき、三組の紐とし、かがりつつ形造りをしたもの。7)子守紐 端にホケットのあつ背負い紐で護身用の刺し文が入る。以上のことから、担ぐ、曳く、抱える、背負うなどの野良仕事に適應して、仕事着の構成は完成しており、刺しの入る方で機能的であると共に、子供の護身のため呪符文を入れた、また一方縁記文を入るなど、子供の働き着に対する配慮がみえ興味深い。